

今泉淑夫著

『亀泉集証』（人物叢書）

吉川弘文館 一〇二二・一一刊
四六 二五六頁 一三〇〇円

中世日本禅宗史の実証的な研究で知られる著者による『世阿弥』（人物叢書）に続く人物評伝である。中世史の基本史料である『蔭涼軒日録』の記主の一人であり、現存する同記録の多くを占める蔭涼職亀泉集証を対象としている。

室町幕府足利將軍家菩提寺である相国寺鹿苑院の塔主鹿苑僧録補佐であった蔭涼職が禅林の経営（本書では室町禅林のキーパーソンととらえている）と幕府との窓口にあたり、特に幕政に大きく関与したことは周知の事実である。

『蔭涼軒日録』はかつて蔭木英雄『蔭涼軒日録―室町禅林とその周辺』により初めて正面から分析がなされ、蔭涼職季瓊真薬の記載部分が公的なものであるのに対し亀泉集証のそれは公私豊富な内容が多いと指摘されたが、本書はこの研究を深化させ、多彩な記事を丹念に分析整理したものである。

かつて私自身も『五山と中世の社会』という著書を編む際に、同じ蔭涼職の立場にあった季瓊真薬に比して、亀泉集証の残した記録が豊富であるものの、逆に断片的記載が多く、その背景にある人的ネットワークや禅林・政治・文化など底知れぬ奥深さを感じとり人名比定からして苦労した経験がある。同記録からこれら

の実態を浮き彫りにするのは極めて難しい作業である。著者の古記録読解への熱意と根気に敬意を表したい。

本書の構成は亀泉の生涯・禅林の広範な人的交流・幕府政治への関与などへの広がりを示すものである。章ごとに特に印象に残った記述を書き上げてみよう。

第一章「幼少時代」では永享七年の生年説の矛盾を突き、応永三十一年生誕説を採っている。入室後の煎点の場において亀泉と同郷出身の同朋衆宣阿との交流が見られる。宣阿は数ある同朋の中でもきわめて興味深い人物である。作刀にも関わり、煎点の場において飾られた五山僧の賛詩が寄せた屏風を所有しているというのである。亀泉を通して五山文化の奥深さや人脈を示唆する記述である。第二章「青年期の亀泉」では亀泉の詩宴参加が後年の五山経営に資するものがあつたのではないかと考えるものがある。例えば有馬温泉行である。酒宴・風流・滝見に加え、五山の経営する荘園の庄主（禅僧）と名主双方の訪問が見られるなど遊興の場が経営面の交渉の場に転ずる可能性を示唆している。第三章「一山派の人々」を読むと、一山一寧の門派が室町時代において書跡・文芸等多方面に才能を發揮したグループとなり、結果として派を超える交友関係を亀泉が継承したことが読み取れる。第四章「蔭涼職について」は蔭涼職の成立の経緯や亀泉以前・以後の歴代蔭涼職の事績を説明する。亀泉の項目で印象に残ったのは文明十七年の義政御成の打ち合わせで義政から亀泉の内議（内々の相談）による対応が認められていることである。鹿苑僧録をこえて蔭涼職が政治中枢に関与する一例を見い出すことができた。さらに面白

いのは、禅林の伝統的な内部規範が変化しつつあったこの時期に、それを動かす立場にあった亀泉が柔軟かつ繊細な対応をしていることが看取できる。従来は人望・人脈を有するという評価でどまっていた亀泉の本質に踏みこんだ説明となっている。六章では『蔭涼軒日録』の原本・刊本・写本や亀泉の後継の継之景俊の書いた「継之日件」を取り上げる。史料編纂所での業務で蓄積された知見がいかなく示されている。第七章「諸賢雜文」については、応仁の乱時に避難生活を余儀なくされた亀泉益之宗箴が京都周辺にとどまった夢窓派の僧に出した書簡を紹介する。亀泉自身は北宋の詩人陳師道の『後山集』などを読んでいた。またかつて亀泉と同じ一山派に属しながら応仁の乱を契機に俗界に身を置いた万里集九との生き方の違いを紹介する。第八章「亀泉の交友」は従来の研究ではその活動の公私の区別が判然としない亀泉について、義政を交えた詩文の交友関係を明らかにする。第九章「亀泉の門人たち」は亀泉の五人の門弟を紹介する。その中で法弟にあたる茂叔集樹との口論の経緯が人間味あふれる禅林の人間関係をしのばせる。第十章「東班僧について」では禅林の経営に従事した東班僧の具体例を取り上げた。教学以外の業務に従事する東班僧についてはかつて今谷明も幕府政治史の側から注目したところであるが、本書では禅林側からの視点で東班僧の多様な活動がさらに広く明らかにされている。また、亀泉がきめ細かく柔軟に東班僧に対応したとする著者の指摘は首肯できる。第十一章「景徐の慈照院」義政の遺骨木像を安置した相国寺の慈照院と塔主景徐周麟の関係、慈照寺への改名のいきさつを述べる。東山文化を

考える上での基本認識となろう。第十二章「松泉軒再建と亀泉の辞職」では相国寺の私寮の再建の過程を丁寧になぞっている。建築史の基本認識となりうるものである。第十三章「亀泉の眼」亀泉の深い絵画鑑賞・鑑定能力と画賛考証の姿勢を浮き彫りにしている。第十四章「亀泉の能筆」は東山文化論としても評価できる内容である。第十五章「亀泉の人物評価」は義政から、禅林の中から優れた僧をリストアップするよう求められ、亀泉が横川景三・景徐周麟を称賛していることを説明している。この部分は横川景三については、著者の旧著『禅僧たちの室町時代—中世禅林ものがたり』でも取り上げられている。第十六章「終焉」では頂相の下絵に不満を持ち、描き直しを指示する亀泉の姿と窪田・狩野らの絵師との関係が興味深い。

全体を通じての印象を述べてみよう。著者の旧著『中世禅籍の研究』でも示された禅宗史料に対する深い知識に裏打ちされ、禅僧の人間味あふれる世界を描いた『禅僧たちの室町時代』（前掲）でのわかりやすい記述を踏襲し、個人の僧を核にしながら禅林社会史から政治史にまで広がる内容である。

最近中井裕子『相国寺研究六・室町時代の相国寺住持と塔頭—蔭涼軒日録を中心に』が刊行されたが、同書と今泉の著書を併読すると『蔭涼軒日録』については、いまだ断片的記載の検討が可能であることを痛感する。今後の課題としては、本書のように蔭涼軒すなわち禅林の司令塔の立場からの視点のみならず、東班僧・西班僧のような実務活動の最前線にあたった僧の立場からの整理や文化面全般からの記録の分析があげられる。建築・絵画・彫刻に

加え、禅宗以外の信仰や儀礼などまだまだ開拓半ばのテーマが残
されている。

最後に、依頼されてから事情により提出まで時間がかかったこ
とをお詫びしたい。

(竹田和夫)